

原理・方法・ルール

スカウティングには、原理と方法とルールの三つがある。

一番大事なのは原理である。原理から方法が生まれ、その方法が原理を曲げてのさばらないようルールが定められるのである。だから方法ばかりを勉強していると原理に暗くなり、時としてルールを越えるにいたる。

これは昔のことわざの「論語読みの論語知らず」、「山に入って山を見ず」に相当する。方法での達人は天狗になりやすい。天狗とは原理に暗いものである。原理に明るいものはむしろ謙虚であり、しかも縦横無尽の力を内蔵している。それは、あらゆる方法が原理から生まれるからである。それは原理から生まれた方法なのか？ それとも原理を曲げてまで、あるいはルールを曲げてまで作った方法なのか？ この点に鋭利な分析を要す。曲げて作った方法は無理である。無理とは「無原理」である。邪道ともいい便法ともいう。これはあまりにも方法に頼ろうとすることから起こった結果である。つかむべきものは「原理」であって「方法」ではない。原理さえつかめば方法はひとりでに泉のごとく湧いてくる。求められているのはそういう人材であって、「術使い」や「要領使い」ではない。

スカウティング誌より

「啐啄同時」（そつたくどうじ）

（道元禅師の教え）

「機を得て両者相応ずる得難い好機」のことをいう。

親鳥は卵を温めてひなをかえすとき、じっくりとその時を待ってひたすら温め続ける。やがて時がきて卵の中のひなが目覚め、内側から殻を破って出ようとする。すると親鳥はすかさず外から殻をつついてやる。やがて殻ははじけてひな鳥の誕生となる。（ひなが内からつつくことを「啐」といい、親鳥が外からつつくのを「啄」という。）

これは修行者の機の熟したのを見て、修行僧を指導する高僧が、さとの動機を与えることをいう。それがいかにデリケートであるか、親鳥とひなとの「啐」と「啄」が少しでもズレたら生命は継承されません。同様にさとりという永遠の仏のいのちも啐啄のときを誤ると伝わりません。きわめてデリケートであるので「啐啄之機」ともいいます。

指導者がスカウトを指導するとき、「啐啄之機」を見逃さず、一人一人のスカウトを見つめながら、最善の手だてをつくしてその可能性を引き出し、自発的に実践しようとするとき、指導者は機を逸することなくすばやく適切な指導を行う。そこでスカウトのやる気がぐっとふくらみ、大きなエネルギーとなって目標に向かって前進していく。